

語り継がれた伝承民話③

湯川の牧と名馬摺墨

岡垣歴史文化研究会 石井 邦一

これは馬の話である。だが馬は馬でも歴史に名を留めた馬で、それも湯川山の牧場で生まれ育った馬の物語である。

『平家物語』巻九に源平合戦の「宇治川先陣」の項がある。ここに、平氏を攻めて京都を占拠した木曾義仲が、乱暴狼藉を働いたことで、これを討伐すべく派兵された源義経ら源氏の軍勢が、宇治川を渡る先陣争いの様子が書かれている。

ときは寿永三年(1184)正月二十日で、この先陣争いで活躍するのが、源頼朝が授けた名馬二頭で、すなわち佐々木四郎高綱が乗る「生けずき」と、梶原源太景季が乗る「摺墨」の二頭である。

この先陣争いは、佐々木四郎の謀りで梶原源太は遅れをとったが、この二人の渡河で勢いづいた源氏の軍は、対岸の木曾の

軍勢を打ち負かし大勝を得た。このとき、「摺墨」は敵の矢が頭部に当たり傷つき、景季も一ノ谷合戦で討死した。名前の「摺墨」は、文字通り全身が漆黒の毛並みだったからだろう。この「摺墨」が生まれたのが、湯川の牧なのである。

湯川山は、岡垣と宗像の境域に連なる孔大寺山系の北端に位置し、標高471・4メートルのなだらかな山容を見せている。山の北側は、緩やかな稜線をなし、そのまま響灘に没している。この広々とした山麓が牧場であり「摺墨」の懐かしい故郷だったのである。この牧場のことが『筑前國統風土記』(貝原益軒著)に、次のように書かれている。

「初浦の上に大なる牧址あり。めぐりに濠有て湯川山に至る。何の時に出来たりと云事をしらず。俗説には神代の牧なりと云

とあり、また慶応三年(1867)に書かれた地元文書にも、「波津湯川山二馬牧始ル。堀廻シ夫高三千人之積リ。當別府触中ヨリ出夫致ス。百姓中困ル」とあり、牧の整備に遠賀郡の各村から動員されていたことが判る。

さて宇治川の先陣争いで有名になった「摺墨」であるが、傷ついた病軀を療養していた侘びしさの中で、自分が育った湯川の牧がにわかになんか恋しくなった。その恋しさに矢も楯もたまらず、「摺墨」は京都からはるばると九州を目指して歩いた。途中、空腹や疲れにもめげずに湯川恋しの一念で歩いた。遙々と岡垣の地にまでたどりつき、西黒山まで来ると、そこから懐かしい湯川山が見えた。それを目にして安堵したのか、そこでどつと倒れてしまった。氣息奄々の「摺墨」は、やがてそのまま息絶えた。

この「摺墨」の愛郷心に打たれた村人は、これを西黒山の春日神社に牧大明神として祀り、九月十三日に牛馬の神様としてお籠もりをし供養した。

この「摺墨」が西黒山に帰りついたとき、踏んでいた下の石に

蹄の跡がついたと言う。この直径1メートルの大石が、湯川の牧神社の境内に鎮座している。牧場跡には、いまも牧があつたころの濠や囲い土手などが残り、また湯川の海辺の黒崎ノ鼻には、海に面した断崖に、「摺墨」が秣として食べたという草があり、名馬草と呼ばれている。



▲西黒山春日神社から望める湯川山